

国際バカロレアにおける授業の目標設定についての一考察

—音楽授業のモデルプランをもとに—

安江 真由美¹
松永 洋介²

1 問題の所在と研究の目的

近年日本でも注目されつつある国際バカロレア (International Baccalaureate: IB) は、平成28年7月1日現在、世界140以上の国・地域、4,610校において実施されている。日本政府は「2018年までに高校で200校」という目標を打ち出している³が、これは高大連携あるいは新しい大学入試システムとの関連を意識してのことではないかと筆者らは予想している。

後述するように、IBには年齢によって4つのプログラムが存在するが、この時点での日本政府の考えは、大学に接続するディプロマ・プログラム (DP) 段階に焦点が当てられているようである。

しかしながらIBが本来目指すものとしては10の学習者像があり、これはIB機構 (IBO) が発行する印刷物のトップに、IBの使命と共に必ず表記されている⁴。すなわち、ここに示されている10の学習者像がIBの最終目標と言っても差し支えないといえよう。したがって、IBは大学入試のためのものだけではなく、児童生徒の人間発達を担う全人教育としての意義があるといえる。そのためにIBでは既成の教科ではなく、それに該当する学問領域によって学習が行われ、それぞれが相互に関連し合い、補完し合って一つの目標へと収斂される。では、音楽はどのように10の学習者像と関わることができるのであろうか。

筆者らは先に、「国際バカロレア教育における音楽教育の可能性」と題して、初等教育課程におけるモデルプランを提案した⁵。今回はそのプランを10の学習者像へのアプローチの視点から再検討することを通して、IBの授業構想において、目標設定の在り方を探ることを目的とした。

2 IBにおける指導の構造

(1) IBの使命と学習者像

IBの使命は、次のように示されている。

「国際バカロレア (IB) は、多様な文化の理解と尊重の精神を通じて、より良い、より平和な世界を築くことに貢献する、探究心、知識、思いやりに富んだ若者の育成を目的としています。この目的のため、IBは、学校や政府、国際機関と協力しながら、チャレンジに満ちた国際教育プログラムと厳格な評価の仕組みの開発に取り組んでいます。IBのプログラムは、世界各地で学ぶ児童生徒に、人がもつ違いを違いとして理解し、自分と異なる考えの人々にもそれぞれの正しさがあり得ると認めることのできる人として、積極的に、そして共感する心をもって生涯にわたって学び続けるよう働き

1 東海学園大学

2 岐阜大学

3 教育再生実行会議第三次提言「これからの大学教育等の在り方について」(平成25年5月28日), p.4

および「日本再興戦略 -JAPAN is BACK-」(平成25年6月14日閣議決定) p.38など。

4 例えば国際バカロレア機構 (2014) 「国際バカロレア (IB) の教育とは?」, 2013年8月に発行の英文原本What is an IB education?の日本語版<http://www.ibo.org/globalassets/digital-toolkit/brochures/what-is-an-ib-education-jp.pdf>より入手可能。

5 安江真由美・松永洋介 (2015) 「国際バカロレア教育における音楽教育の可能性」, 『学校音楽教育研究』Voi.19, 日本学校音楽教育実践学会, pp.112-113

かけています。』

これに続いて、IBの学習者像が示されている。それは「10の学習者像 (Learner Profile)」と呼ばれており、IBの全てのプログラムで目指されているものである。すなわち、①探究する人 (Inquirers)、②知識のある人 (Knowledgeable)、③考える人 (Thinkers)、④コミュニケーションができる人 (Communicators)、⑤信念をもつ人 (Principled)、⑥心を開く人 (Open-minded)、⑦思いやりのある人 (Caring)、⑧挑戦する人 (Risk-takers)、⑨バランスのとれた人 (Balanced)、⑩振り返りができる人 (Reflective) である。

IBの使命では、その目的として「多様な文化の理解と尊重の精神を通じて、より良い、より平和な世界を築くことに貢献する、探究心、知識、思いやりに富んだ若者の育成」を掲げている。この中のポイントは「探究心、知識、思いやりに富んだ若者の育成」である。そのためにそれぞれのプログラムを通して、この目標の達成を目指しているのであり、日本での学校教育法における教育の目的に該当するものといえる。

それを具体的な人間像として示したものが10の学習者像である。目標からは①、②、⑦が対応するが、それ以外の7つはIBの使命と全く関係のないものではなく、IBの使命を実現するための側面であると考えられる。

(2) IBプログラムの種類

IBには現在4つの教育のプログラムが存在している。1つ目は初等教育プログラム (Primary Years Programme : PYP)、2つ目は中等教育プログラム (Middle Years Programme : MYP)、3つ目は大学入試資格取得プログラム (ディプロマ・プログラム Diploma Programme : DP)、そして4つ目はIBキャリア関連教育サーティフィケート (Career-related Certificate : IBCC⁶) である。IBCCは大学進学を目的としない生徒を対象として、2013年より実施された。本来IBは大学入学資格取得を目的としたDPから始まっているが、歴史を重ねるにつれ中等教育、初等教育へとその対象を広げてきた。その中で、一人ひとりの個性を重視してそれぞれの多様な生き方を保障しようとする、必ずしも生徒全員が大学進学を目的とするわけではないことが顕在化してくる。IBCCはその流れの中でできたものであり、IBOの理念本来の姿を反映していると言える。

(3) 教師の役割

IBの教師は、ファシリテーターとしての役割を担うこととなっている。そこでは、プレゼンテーション力やディベート力、スピーチ力、子ども目線で共に楽しめる力等が必要である。つまり、子どもたちの自発的な学びを手助けするということである。特に、幼児を対象とする保育者は、幼稚園教育要領においては子どもの育ちを支援する援助者という位置づけである。一方、小学校学習指導要領上では、教師は児童生徒や学校の実態に応じて柔軟に指導を行うことが認められている。したがって、IBと同じようにファシリテーターの役割を担うことも可能であるが、教師主導型の授業を展開することも可能である。つまり、小学校学習指導要領においては、教師はリーダーとしての役割を持つこともあれば、ファシリテーターとしての役割を持つこともあり、それが教師の個性による場合と、指導目標によって立場が変わる場合とに分けられると考えた⁷。

(4) PYPにおける学問的視点とテーマ

3歳児から12歳児を対象としたPYPでは、フレームワークに基づく授業が構成される。フレーム

6 文部科学省では「Career-related Program : CP」と表記しているが、本論文では、IBOに従ってIBCCを用いる。

7 安江真由美 (2016), 「国際バカロレア (IB) と学習指導要領における音楽探究活動の比較—初等教育課程に着目して—」, 日本学校音楽教育実践学会第21回全国大会 (平成28年8月20日, 北海道教育大学) 発表資料

ワークとは、相互に関係のある3つの「質問」と、5つの「基本要素」から成り立っている。

3つの質問は、「私たちは何を学びたいか」、「私たちは、どうしたら、よい学習ができるか」、「私たちは、どうしたら何を学んだかがわかるか」から成り立っている。また、5つの「基本要素」は、「概念」「知識」「技術」「態度」「行動」から成り立ち、これらすべてのバランスがとれるようにカリキュラムを組むことが求められている。

以下それぞれについて説明する。

①「概念」(Key Concepts)

「概念」は、「Form (形態：それは、どんなものか)」「Function (機能：それはどうなっているのか。どうやって動くのか)」「Causation (原因：それは、どうしてそうなっているのか)」「Change (変化：それは、どのように変わってきているのか)」「Connections (関連：それは、他のもの(こと)とどういうつながりがあるのか)」「Perspectives (見方：どういう考え方(ものの見方)をしているのか)」「Responsibility (責任：わたしたちがしなければならないことは何か)」「Reflection (振り返り：どうしたらわかるのか)」の8項目からなる。

「概念」は学習を計画するときに1つの単元において3つまで使用し、1年間の学習を通して全ての概念をカバーすることが求められている。

②「知識」(Knowledge)

IBでは、日本の学校のように、国語、算数、理科、社会といった教科別の授業ではなく、「6つの学問的視点」をカリキュラムのなかに組み込んだユニットとの学習が行われる。そのユニットは、i) 言語的視点、ii) 社会学的視点、iii) 数学的視点、iv) 芸術的視点、v) 科学的視点、vi) 体育・道徳的視点の6つに基づいて設定される。

この「6つの学問的視点」の上位概念として、「6つのテーマ」が存在する。それは、a. 「自分自身について (Who we are)」, b. 「私たちが置かれている場所や時代について (Where we are in place and time)」, c. 「自己の表現方法について (How we express ourselves)」, d. 「すべてのことはどのように機能しているかについて (How the world works)」, e. 「社会を体系付ける方法について (How we organize ourselves)」, f. 「地球に共存する術について (Sharing the planet)」である。

学校現場では、上記の「6つのテーマ」を探究していくのに必要な知識体系として、「6つの学問的視点」からふさわしいものを選び出し、それらを組み合わせ、教科融合型の学習ユニットを作成する。子どもたちは、1ユニットあたり約六週間、全部で6つのユニットを、一年かけて学ぶ。なお、3歳から5歳の幼児では、各学年次または学年ごとに少なくとも4つの単元に取り組む。そのうちの2つはa. 「自分自身について (Who we are)」, c. 「自己の表現方法について (How we express ourselves)」であることが必要とされる。このユニットに対し、セントラルアイディアを設定する。この際、セントラルアイディアは必ず1文で示すことになっている。

③「技術(教科を超えたスキル)」(Transdisciplinary Skills)

「技術」は、a. 「Social Skills (社会的スキル)」, b. 「Research skills (リサーチスキル)」, c. 「Thinking skills (思考スキル)」, d. 「Self-management skills (自己管理スキル)」, e. 「Communication skills (コミュニケーションスキル)」の5つからなる。これらは特定の教科の中で用いられるものではなく、どの教科にも共通して必要となる。

④「態度」(attitudes)

態度は、「Appreciation感謝」「Commitment責任」「Confidence自信」「Cooperation協力」「Creativity創造性」「Curiosity好奇心」「Empathy共感」「Enthusiasm熱意」「Independence自立」「Integrity誠実」「Respect尊敬/尊重」「Tolerance寛容」の12項目からなっている。

⑤「行動」(「指導」と「学習」)

「行動」は、「探究」、「活動」、「振り返り」の3つからなる。

4 PYPにおける音楽の授業試案

(1) 授業プログラム作成の手順

ここではPYPにおける音楽の授業を、音楽はどのような授業となりうるのか、本来の教科としての音楽の特性はIBではどのように展開されるのかの2点を念頭に授業案を作成した。

作成にあたってはIBで用いられている *Planning the inquiry* (探究の計画) にしたがって計画した。

まず「6つのテーマ」から3番目の「自己の表現方法について (How we express ourselves)」というユニットを選択する。なぜならば、音楽は表現の一形態であり、このユニットが最も適していると考えられるからである。次にここで扱う知識領域として、「6つの学問的視点」より「芸術的視点」「科学的視点」の2つを選択する。「芸術的視点」を選択したのは、音楽が芸術の一分野だからであり、「科学的視点」を選択したのは、このユニットで楽器づくりを行うからである。

次に *Sample programme of inquiry* (2012) (以下SPIと表記) を参考に探究計画の続きを立てる。この資料は、3～12歳まで1歳ごとに9段階に分けて計画されている。ここにはサンプルシートがあり、「自己の表現方法について (How we express ourselves)」など「6つのテーマ」から出来ている。また、それぞれのマス目の中に「セントラルアイディア」、「キー・コンセプト」、「関係概念」、「探究例」が含まれており、授業計画段階でこのマス目の中に書き込んでいくことで授業プランを作ることができる。

次に「自己の表現方法について (How we express ourselves)」にサンプルとして設定されているものを紹介する。各学習段階には「セントラルアイディア (Central Idea)」が規定され、その学習によって獲得される概念を明示している。「セントラルアイディア」はPYPの探究型学習にとっては最重要単語である。これは概念的思考が必要となる永続的で普遍的な理解を表した記述のことで、最終目的にも成りうる。

SPIでは10歳のところの「セントラルアイディア」は「芸術を創造したり反応したりすることは私たち自身と私たちを取り巻く世界の理解へ発展する」とされている。

次に「キー・コンセプト」は機能、見方、振り返りであり、「関係概念」は創造性、物の見方、先入観/演出である。このあとに「探究例」が示されている。それは「社会の価値や問題の振り返りは芸術においていかにして可能となるか」、「芸術作品が作り出された前後関係」、「芸術について学ぶことはいかに真価を進展させるか」、さらに「芸術の鑑賞は個人の選択だ」である。

今回は、「セントラルアイディア」、「キー・コンセプト」、「関係概念」について、SPIに基づき作成した。

学習過程は「探究」「活動」「振り返り」の3つからなる。そこで、まず「探究」段階を計画する。IBの学習において「探究」は重要な位置づけである。このことについて大迫は次のように述べている。「IB (とりわけPYP/MYP) で『探究』という場合、基本的には『structured inquiry (計画された探究)』を行うこととなります。教師が問いかけをし、あらかじめ学習経験を計画しますが、探究の結果はある意味『先のお楽しみ』ということとなります。生徒の提案で探究が進むこともありますし、個人やグループが学習経験を別に計画して実行することもあります。もちろんそうした流れは推奨されています。」⁸である。つまり、年齢が下になればなるほど、探究課題を見つけるのが困難であると考えられるため、教師が探究のきっかけを作るようにしていると考えられる。このことは幼稚園の自由保育における保育案の作成に共通するものがあると言えよう。

8 大迫弘和 『国際バカロレアを知るために』水王社 (2014) pp.144-145

(2) 探究モデルプラン：「音の発見と音楽づくりを通して音楽文化を理解する」

本事例では「音の発見と音楽づくりを通して音楽文化を理解する」ことを計画した。

授業は6週間の計画で行う。1週間では50分を1コマとして2コマ行うことを想定する。また、各時間の学習過程は、IBの学習計画作成手順に従い、「探究」「活動」「振り返り」の3段階で計画した。

①第1時

A. 探究

教師はストローを1本見せることから始める。児童に「何に使うものですか」「ストローを使って何ができる」と問いかける。

児童は気づいたことを言っていく。児童は、ストローは吸うために使用することを知識として知っているが、吹くことにも気づけると大いに褒める。

次に教師は、ストロー笛を吹く。ただし、仕組みは視覚的に公開しない。そのため、ストロー笛を吹く際、目から下は画用紙などで隠し、音のみ披露する。したがって、ストロー笛のポイントとなる吹き口も児童には見せない。ストローが楽器に変身することを知らない児童たちは、どのようにして音が鳴るのか興味を持つと考えられる。

B. 活動

ストロー笛に興味を持った児童は、その作り方を知りたいと願う。そこで「自分で調べられるかな」と誘うことによって探究活動を始める。その際、インターネットや図書館等を利用してよいことを知らせておく。10歳までの探究活動により、キーワード検索が使用可能というスキルを持っていることが前提である。本に関しては教師があらかじめ、手作り楽器辞典の類のもの等を準備しておく。また、場合によっては家の人や楽器屋・笛製作者に電話でインタビュー・相談したいと考える児童にはそのサポートをする。

この活動は、グループで行う。そのグループ分けは人数ゲームなどで行い、生まれ月の早い・遅いに分かれないように、児童の成長過程のバランスをとるようにする。

グループ活動では、以下2点について話し合う。

まず、各自で調べたストロー笛の作り方は実行可能かということである。実際にやってみなければわからないことなので、とりあえず皆の意見をまとめ記すだけでも良いこととする。次に、各自必要だと思いのものを話し合い、持ち物の分担を決める。ただし、ストローだけは全員がそれぞれ持ってくることとする。この段階では、児童はストローにはいろいろな太さや長さがあることに気づいていない。またフラップ用のスプーン状になったストローもある。

そこでどのようなストローでもよいことを知らせるために、次のように問いかける。

「みんなお揃いのストロー笛にしますか？」

児童が「いいえ」と答えた場合には「そうだね！各自、自分が好きなストローを持ってこようね。好きなストローがたくさんあったら全部持ってきてもいいからね。色んな長さ・太さ・色のものがあるかもしれないよ」と伝える。

しかし、教師の質問に児童が「はい」と答えた場合は、「みんなお揃いも素敵だね！でも今回はみんな一人一人違ってそれぞれに良いところがあるように、ストローにもそれぞれ良いところがあるはずだから、ストローの良いところ見つけをしてみない？色んな長さ・太さ・色のものを持ってきてもいいよ」と提案する。

また、様々な種類のストロー笛を作ることと、失敗したときの予備という2つの理由から複数本持ってきてもよいことを伝えておく。

C. 振り返り

グループごとに立てた計画は、実行可能か否かをそれぞれグループ内で検討する。そして、次の時間までに準備するものの分担を決める。また、ストローは各自持ってくることを確認する。

②第2時

A. 探究

前回立てた計画をもとに、持参したものを使用し、ストロー笛を製作する。ここでは作る段階と鳴らす段階の2つがある。しかし鳴らすには技術が必要であり、なかなか鳴らないことが予想される。その場合、鳴らない原因を探究し、鳴らすためのコツを探究するようにサポートする。

ストロー笛が出来上がると、「どうしてみんな音が違うのかな」と問いかける。

様々な種類のストローを各自持ち寄ることが前時の確認事項であった。したがって、児童は、さまざまな長さや太さのストローを持ってきていると考えられる。ここで長さや太さによる音の違いに気づく。また児童から「ストローも切ったらどうなるのかな」という声があることを期待したいが、意見が出なければ短いストローと長いストローの音を聞かせ、教師から「どうしてかな」と問いかける。

また、教師は発展的課題として「音を大きくするにはどうすればよいか」「ストローを2本使って吹くことはできるか」「何か別のものに入れて吹いたらどうなるか」等を発問する。

これらの課題をもとに、グループごとに気になることや行いたいことを相談し、探究する。例えば、音を大きくするには笛の吹き口と反対側をメガホンのような先を広くしたものをつける工夫が必要となる。これは、トランペット等の楽器の発音原理を知ることにつながる。さらにストローを2本使う場合、細い方を太い方の中に入れ、出し入れをすることによってスライドホイッスルの鳴らし方になる。これはまた、トロンボーン等の楽器の原理の理解にもつながる。さらに、別のものに入れて吹いたらというものに関しては、ラップ等の芯など筒状のものに入れて吹くことを想定する。これはファゴット等の楽器の発音原理を知ることにつながる。

B. 活動

児童はグループで相談をしながらストロー笛を制作する。音が鳴る笛・鳴らない笛が出来上がる。その原因やコツを探究する。

ここでグループによる話し合いを行うが、その場合IBではFishbowl Activity (水族館) という手法がある。

分かれたグループのうちの1つを指名し、話し合いをさせる。その際、大きな紙に皆で書き込みをしてもらう。残りのグループは周りに散らばって立ち、話し合っているグループの内容を見学する。話し合いや書き込みを行うグループについては、教師が比較的進度の進んだグループを選ぶ。このグループは話し合いの学習ができる。また見学するグループは、教師とグループとのやり取り等が学べる。なお、書き込みについては大きな紙の中心にセントラルアイデアやそのときの課題を書く。そして、そこから派生するように、皆で案を出し合い書いていく。

見学後は、残りのグループも同じように考えを相談し、紙に記す時間を設ける。今回の場合、穴は開けた方がいいのか、長さはどのようにしたらいいのか、どの太さのストローが笛にするのに適しているのかが課題となる。そしてグループ全員の笛が鳴るようになったところで、音の違いを探究する。また、発展的な工夫として、音を大きくするにはどうしたらいいのか、ストローを2本使った笛はあるのか、何か別のものに入れて吹いたらどうなるのか等、各グループごとで相談したり調べたりし、新たな笛も作成することも可能である。

C. 振り返り

どのように作成したか、またはどのように工夫をしたか、その工夫によって何がどう変わったのか等を発表する。パソコンを使用しても良い。大きな紙に写真などを貼っても良い。もちろん絵を描いて紹介しても良い。紹介の仕方は各グループに委ねられる。

③第3時

A. 探究

まず、前回作ったストロー笛を演奏するため練習する。

さらに、ストロー笛以外にもいろいろな笛があることに気づかせる。その際「ストロー笛以外にもどんな笛があるかな」「笛の種類は」「笛と音色の関係は」と問いかけ、子どもの活動を促す。縦の笛もあれば、横の笛もある。また、リードがあるもの無いもの、リードがあるものでも、1枚のもの2枚のもの等、様々であることに気づけると良い。

B. 活動

前回までに制作した様々な笛の練習をする。

加えて、教師の発問から、グループごとに図書館やインターネットなどを使用して、笛には様々な種類があることを知る。例えばリコーダーの種類、ピッコロとフルート、クラリネットとバゼットホルン、オーボエとイングリッシュホルン、ディジュリドゥ等の民族楽器が考えられる

可能であれば実際に吹いて音色を確かめるようにしたいが、実際にどのような音がするのかを確かめるために、デジタルでiPad等を使用し希望の音を聴くことができるように準備しておく。

C. 振り返り

この時間に新しく知った笛についてまとめ、発表する。国や地域、または形状によって音色がどう音色が違うのかもまとめる。音源はインターネット上のもの、CDなど使用可能とする。その際、著作権についての配慮も必要となる。

④第4時

A. 探究

笛の他にはどのような楽器があるのか探究する。

例えば「笛の他にもいろいろな楽器があるね。どのようなものがあるのかな」と問いかけることからこの時間の探究をスタートさせる。世界中の様々な楽器を探究することが目的となるが、手作り楽器について探究する場合はそれも認める。

B. 活動

グループごとに様々な楽器について調べる。加えてそれぞれの音楽の形式や様式を探究する。楽器の変化から音楽の歴史を知っても良い。

C. 振り返り

世界・日本の楽器について知ったことを発表する。楽器の変化から音楽の歴史を示しても良い。グループごとに調べたことは違うので発表の内容も異なってくる。

⑤第5時

A. 探究

これまでの活動によって、多くの楽器の存在や発音原理について知識を得たことになる。本時では、まずそれらを復習し、演奏出来るようにすることをめざす。

その際、新たに日常生活する際に使用しているものから楽器を製作することも可能とする。第1時ではストロー笛を製作したが、楽器について調べる過程で、さまざまな楽器があると同時に、日常生活している物であっても楽器になりうることを知ることがある。そこで「楽器を組み合わせたらどんな音楽になるかな」「ストロー笛以外にも、楽器になりそうなものはあるかな」と問いかける。

音楽を製作し、演奏するためには何人かで集まらなければならない場合もある。その際は第4時で探究したように、音楽演奏の形態は様々であることを想起出来るようにしておく。

B. 活動

まず、どのような音楽をつくるのか話し合うことから始める。その際には何かイメージを持つことから始めたり、グループ内で自由に音を鳴らしたりして、粗削りな作品のイメージを持つようにする。そのためにはグループごとに自由に試行する時間が必要となる。

ある程度作品のイメージができてくると、「楽器」「形式」「形態」の3つの面から考えをまとめていくようにする。そのために、カラー付箋を用い、それぞれのアイデアを1枚に1つ書いていくよう

にする。例えば楽器については赤の付箋に、形式については黄色の付箋に、形態については青の付箋にというようにし、書いたものをホワイトボードや窓などに貼っていく。この場合、貼る場所は付箋の色ごとにまとめることが必要となる。

全グループが付箋に書き記したところで、ギャラリーウォークを行う。ギャラリーウォークとはまるで美術館の絵を見るように、付箋を見ていく活動を指す。美術館の絵は触ってはいけないし、静かに観なければならぬ暗黙の了解のような約束がある。したがってここでもそのように見ていき、互いのアイデアを交流する。なお、これには、美術館におけるマナーを学ぶという側面もある。

ギャラリーウォークを終えた後、各自の知ったことをまず一人で考える。(IBではこの時間を洞窟と呼ぶ)その後、2・3人で意見交換をし(IBではこの時間をカヌーと呼ぶ)、クラス皆で話し合う(IBではこの時間をキャンプファイヤーと呼ぶ)。その際、自分はどんな音楽を作りたいのか、それにはどのような楽器が必要なのか、何人で演奏を行うのかを話し合う。話し合った結果、一人で創作音楽を行っても、数人のグループで行ってもよいこととする。その人数で演奏する理由を発表してから創作音楽や楽器作り、練習を始める。例えば1人で演奏を行う場合には、タブレット等を使用してもよいことにする。そうすると、自分の演奏を入れておき、その後、それを流しながら自らの演奏を重ねるという方法も可能となる。

C. 振り返り

演奏の途中経過を各自録音し、披露する。そしてその内容について振り返り、まとめる。

⑥第6時

A. 探究

前時に行った音楽づくりについて、カヌー・洞窟・キャンプファイヤーの時間を設け、話し合う。ここでは、それぞれの作品においてよい点、改良を必要とする点について話し合いを焦点化していく。

その後、活動を続け音楽づくりが終了となる。グループによっては、踊りをつけたり、衣装を工夫したりするアイデアを出すことも考えられるが、それは各自の自由とする。

最後に発表会を行うが、その際の演奏順等も、児童間の協力と相談と誠実さ、寛容さ、創造性などに委ねる。教師は、あくまでファシリテーターという役割である。児童の力を信じて見守ることが必要である。

B. 活動

自分たちの演奏について、再度、構成、編成、音色等を検討する。場合によっては途中経過の音楽を聴き話し合った上で、グループを変更し統合したり解体したりしてもよいこととする。音楽が出来上がったならそれぞれに視覚を満足させるため、希望するグループには踊りや衣装等の考えを出し合ってもよいこととし、聴覚のみにこだわるグループ等はそのまま工夫を重ね練習を続けるようにする。同時に発表会の準備を全員で相談し決める。

C. 振り返り

グループごとに発表する。このとき、発表の形態、例えば踊りを入れた理由や、衣装を用いた理由なども発表するようにする。また音のみで発表した場合にはその理由も述べる。

5 考察

前節で述べた実践計画を「芸術的視点」と「科学的視点」の2側面から検討する。

(1) 芸術的視点

各時間における芸術的視点は次のようになる。

- ①第1時：日頃何気なく使用しているものがアイデアや工夫次第で楽器に変わることを知る。
- ②第2時：笛を中心とした、様々な楽器の種類を知る。また、音色の違い、楽器の原理を知る。
- ③第3時：笛を始めとして、他楽器にも目を向け、文化背景・音楽の歴史を知っていく。

- ④第4時：音楽創作を行う。個人またはグループがイメージしている音楽を音で表現する場合、どの音が最適であるか考える。また、それを表現するにはどのような音楽形式が適切か模索する。以上を通し、音楽や音の様々な種類、形態を知る。
- ⑤第5時：多くの楽器の種類やその発音原理等を知る。
- ⑥第6時：演奏の質を高めるにはどうしたら良いのか知る。また、音楽と踊りや衣装との関連を考える。場合によっては音の質の向上のみを念頭に練習を重ねる。また、発表会の方法について知る。

(2) 科学的視点

各時間における科学的視点は次のようになる。

- ①第1時：ストローに息を吹き込むことによって音が出ることを知る。
- ②第2時：「どうして笛によって音が違うのかな?」、「笛の先が広がると音が大きくなるのはなぜだろう?」という発問により、笛が短くなると音が高くなり、長くなると低くなるという性質を知る。
- ③第3, 4時：笛の種類、笛と音色の関係等から、木の材質、吹き方等の違いを知る。
- ④第5時：楽器は叩く場所、設置の仕方により、音の響きが変わることを知る。

(3) 視点と学習者像との関わり

(1)(2)に示したように、「芸術的視点」と「科学的視点」には、第2節で述べた「概念」「知識」「技術」「態度」「行動」の各要素が含まれる。例えば(1)芸術的視点では、「知る」という語尾に集約されるように、「知識」が中心となるが、探究活動の中で文化的な背景も含めた文脈の理解が大きく関わってくる。また(2)科学的視点においては、語尾こそ「知る」となっているが知識を得るための探究をすることによる能動的な関わりに着目する必要がある。

しかし、これらは当初からこれらの諸要素を身につけさせようとして計画したものではなく、授業プランを考えていく中で、それぞれの関わりが明確になっていくものである。

したがって、教師が授業を構想し、プランを描く中で、この授業ではどの要素を重点的に扱うかを決めていく必要がある。また、教師はファシリテーターとしての役割を持つため、児童生徒一人一人の個性を見極めつつ、それぞれの要素を伸ばすようにしなくてはならない。つまり、授業の進行にしたがって一人一人の行動を見ながら臨機応変に対応していくことが求められるのである。

それでは以上の実践は、IBが目指す10の学習者像の実現にどのように寄与するのだろうか。

「概念」「知識」「技術」「態度」「行動」の各要素は、IBの使命と10の学習者像を実現するためのものであり、前者は後者の下位ストランズとして位置づけられる。

したがって授業プランを構想する際に、「概念」「知識」「技術」「態度」「行動」の5つの要素が10の学習者像のどれに関わってくるのかを考えておく必要がある。

すべての授業が10の学習者像のどれにも関わるように見えることがある。例えば、先に示したモデルプランでは、活動がグループ単位で行われるため、グループ内の人間関係が作業を進めていく上で重要な要素となることは否めない。その意味では④コミュニケーション、⑦思いやりは欠かせない要素である。しかし、探究活動は必然的に個人からグループへと発展する可能性をもっている。そのように考えるとIBの活動自体がすべての授業の中で10の学習者像へのアプローチを含んでいることになる。

したがって、授業構想の際には、どの学習者像を中心に扱うのか、そこでは「概念」「知識」「技術」「態度」「行動」がどのように関わってくるのかを系統的に示しておくことが必要となるであろう。それはいわゆる指導案(指導計画)を書く場合に、図示されることによって明瞭になる。

今後は、指導計画の立案段階における学習者像と各要素との関係についての指導案のモデルを提出

することを課題としたい。

参考文献

- 大迫弘和 (2013), 『国際バカロレア入門』, 学芸みらい社
大迫弘和 (2014), 『国際バカロレアを知るために』, 水王舎
国際バカロレア機構 (2014), 『国際バカロレア (IB) の教育とは?』
国際バカロレア機構 (2014), 『プログラムの基準と実践要綱』
坪谷ニューエル郁子(2014), 『世界で生きるチカラ』, ダイアモンド社